

## 〔研究ノート〕

記録映画『<sup>しゅっそうのうた</sup>出草之歌』が描く  
台湾原住民戦争遺族の歴史的アイデンティティ

張 原銘\*

## はじめに

今日まで日本の学校教育やマスメディアは、日清戦争・日露戦争後に日本が中国・台湾・朝鮮半島で行っていたコロニアル（植民地）政策について公開的かつ十分な検証をしてこなかったと言える。そのために、日本国内においていまなお多くの人々は侵略された地域の人々の心情を理解しきれないままである。

だが、小泉前首相が任期内に6回にわたり靖国神社を参拝したことによって、中国・韓国・台湾の政府と民間から強い抗議を受け、これをきっかけに日本国内のメディアは過去の日本によるアジア太平洋戦争に関する歴史に向き合う動きが活発となっている（表1参照）。こうした歴史の事実に向き合う一連の動きの中で、筆者がとくに注目しているのは日本人監督：井上修が撮影したドキュメンタリーである。

この記録映画のタイトルは『<sup>しゅっそうのうた</sup>出草之歌 台湾原住民の<sup>とっかん</sup>呐喊 <sup>べいさんいっあん</sup>背山一戦』という。「出草」とは「首狩り」を意味し、「出草之歌」とは「蛮刀を研ぎ澄まし、侵してくる敵に対して戦いを挑む歌」であるという。「背山一戦」は「山を背

にして退路を断った決死の戦い」のことである。

主な内容は、第2次世界大戦で「日本兵」として戦死し、靖国神社に合祀された先祖の霊を取り返そうと闘う「台湾原住民」の姿をおったものである。映画全編にわたって台湾原住民の古来から歌われている歌が流れ、部族の女性リーダー「チワス・アリ（中国語名：高金素梅）」を中心に展開されている。

小論では、第一に、このドキュメンタリーが撮影されることになった背景を紹介する。第二に、台湾原住民が「日本兵」として徴兵され、忘れられている「高砂義勇隊」の過酷な歴史について解説する。この記録映画で台湾原住民の戦争被害者遺族代表チワス・アリ（以下は「チワス」と略す）を中心とする戦争犠牲者の合祀取り下げ訴訟の背景を要約する。第三に、ドキュメンタリーの核心部分である台湾原住民代表の「闘争」の現状を紹介する。これらを通じて、台湾原住民戦争遺族の歴史的アイデンティティについて考察する。

## 1. 「出草之歌」が作られた経緯

監督の井上修によると、1972年に『アジアはひとつ』という記録映画の製作に参加したとい

\* 立命館大学大学院社会学研究科研究生

表1 小泉首相の靖国神社参拝年表

回数	時 間	内 容
1回目	2001年8月13日	自民党総裁選で公約した終戦記念日の参拝を2日前倒し。モーニング姿で神道式（二拝二拍手一拝）ではなく本殿で一礼のみ。「内閣総理大臣 小泉純一郎」と記帳。献花料を私費で。
2回目	2002年4月21日	春季例大祭の初日。服装や記帳、献花料は1回目と同様の対応。
3回目	2003年1月14日	服装や記帳、献花料は1回目と同様の対応。「所感」や「談話」は公表せず。
4回目	2004年1月1日	元日。紋付はかま姿。帳、献花料は1回目と同様の対応。
5回目	2005年10月17日	秋季例大祭の初日。過去4度の参拝とは異なり本殿に昇らず、一般参拝客と同様に手前の拝殿で礼をして賽銭を投じた。背広姿で、記帳はせず。献花料、玉串料は支払わず。
6回目	2006年8月15日	公用車で靖国神社を訪れ、「内閣総理大臣 小泉純一郎」と記帳。モーニング姿で本殿に上がり、「二拝二拍手一拝」の神道形式はとらずに一礼し、玉串料の代わりに献花料3万円を私費で払った。

出所「朝日新聞」2005年10月18日と2006年8月15日の朝刊

う。制作に当たって戦争中日本の領土になった地域を訪ね、当時の様子や人々の思いをフィルムに納めた。『アジアはひとつ』の最後に台湾原住民の話も撮影された。その中にある台湾原住民の長老の「もう一度戦争がしたい」という言葉は井上監督に強いインパクトを与えた。その30年後、井上は2002年の夏に、台湾原住民代表3名が靖国神社の境内で自らの歌で合祀されている先祖の霊を取り返すという通知をもらい、同行してその儀式を撮影した。その後、原住民代表が正式に神社に台湾原住民の戦争犠牲者の合祀取り下げ願いを提出したが、神社側に全く無視され、面会すら断られたという状況を見て、代表者の1人であるチワスが神社に向かって「私たちは祖先の霊を取り戻すまで、何回でもやって来る。次はこの10倍の原住民がやってくるだろう！」と宣言して、神社を後にした。

その瞬間、井上はチワスの言葉がまさに30年前長老が言っていた「戦争」だと思い、この「戦争＝闘い」を記録しておかなくてはならな

いと感じた。こうしてドキュメンタリー『出草之歌』の制作がスタートされることになった<sup>1)</sup>。

## 2. 「高砂義勇隊」をめぐる合祀取り下げの要求

ここでは、マイノリティとしての台湾原住民の抑圧、搾取されていた歴史と高砂義勇隊のことを簡単にふれたいと思う。まず「台湾原住民」という呼称の由来を説明したい。

台湾の人口約2300万人の内、ほとんどはかつて中国から渡ってきた「漢族」の人々である。しかし、漢族が住み着く以前に、より古くからこの地に住み着いていた約40万人の「原住民族」がいる。歴史上で言う「台湾原住民」とは漢族移住以前から住み着いていたこの原住民俗を指す。この原住民族の中には、タイヤル族の他、ブヌン・パイワン・タロコ等約13の部族がある。

この原住民族は清朝時代漢族からは「熟番」や「生番」と呼ばれ、日本時代には「高砂族」、戦後中華民国政府には「高山族」や「山胞」と

呼ばれていた。それらはすべて植民者が勝手に付けた呼称である。90年代に入り原住民らは歴史上初めて自らの意思によって“元からこの地に暮らしていた者”という意味を込めて「原住民」と名乗りはじめていた。その後原住民が様々な努力を重ねて、1994年に「台湾原住民」という正式な呼称が台湾の憲法に記載された。(資料1参照)

近年日本の社会学では、アイヌ民族のことを「先住民」と呼んでいるが、中国語では「先住民」という言葉は「すでに滅んでしまった民族・祖先」を意味しているため、台湾では一般的に「先住民」という言葉を使用せず、その代わりに「原住民」(中国語表記では, yuán zhù míng, 英語: Indigenous Taiwanese/Taiwanese aborigine) と呼称している。

日清戦争後の1895年、日本は台湾を植民地として支配しはじめた。その直後に、台湾総督府は「藩地=無主地=国有地」の法令(旧令26号)を布告して、台湾の原住民族が数千年来生活を維持してきた領域(土地)を強制的に奪っていった。当時、原住民族はまったくの無権利状態におかれ、日本総督府の意のままに搾取、抑圧されていた。危機に瀕した原住民族は各地で日本植民者に対して熾烈な抵抗闘争を展開する。

原住民の抵抗に直面して、台湾総督府は原住民族に対して武力討伐を行うと共に、生き残った人々に対しては、徹底した「同化=皇民化」政策を推進した。各地に「蕃童教育所」が作られ、日本語教育を推進し、同時に「天皇神道」信仰を以って洗脳する教育が行われた。

侵略戦争の戦線が南方に延びはじめた1942年、日本は台湾原住民の青年を中心に「高砂義勇隊」を編成し、2万人余りを南洋の戦線に送り込んだ。「高砂義勇隊」は、名目的には「募



資料1 ドキュメンタリー『出草之歌』主人公：チワス・アリ、中国語名は「高金素梅」

集」という形式を取っていたが、実際には派出所の日本人警官が選出し、指名したものに他ならない。当時の警官は全員日本人であり、原住民族の「生殺与奪」権を握り、部落の絶対権力者であった彼らに応召する以外、他には道がなかった。「高砂義勇隊」はほとんど第一線に派遣されたため、戦死者が多く、戦後の生還者は3分の1に過ぎなかった。

日清戦争後の武力鎮圧により、1910年から1915年までの間に、原住民は大量に虐殺された。生き残った子や孫たちは、青壮年に成長したあかつき、太平洋戦争中の1942年頃から、「高砂義勇隊」として強制的に徴兵され、南洋の前線に送られ、戦争の消耗品にされたのである。

日本軍国主義者が原住民に対して行ったこれらの行為は、原住民の間では「二代滅族」と呼ばれている。日清戦争直後の武力討伐は、言わば、原住民の一代目に対する民族撲滅行為であった。さらに、太平洋戦時下で高砂義勇隊として使い捨てにされたことは、原住民の二代目に対する民族撲滅行為として受け止められている。民族的犠牲を強いられたこれら二つの事件をめぐり民族的怒りと反植民地意識が「返我<sup>ファンウオ</sup>

ズリン祖霊」（祖先の霊を返せという意味）運動の基底にある。

戦後、靖国神社は、高砂義勇隊の戦没者を遺族に無断で、戦争指導者と同列に合祀した。これに対して、原住民は「返我祖霊」のスローガンのもと、日本政府と靖国神社を相手どって合祀取り下げ訴訟をおこした。「返我祖霊」運動の土台にあるものが、戦争責任追及の怒りだけでないことに注意すべきである。

50年に及ぶ日本による植民地支配と、その後も長年にわたって国民党政権の「反共」, 「言論統制」政策のもと、原住民族が自らの歴史や民族史発掘・自己確認を取り戻す機会は今日まで失われ続けたままである。映画『出草之歌』の中で、台湾原住民族による「返我祖霊」運動を中心的に担ったチワスは、台湾原住民としての自分の歴史をほとんど知らなかったと述べている。2002年に友人の家で偶然目にした写真（日本支配に抵抗する原住民を日本軍が虐殺する写真）に衝撃を受け、ようやく自らの民族の歴史に目覚めたとチワスが語るシーンが映画の中に登場する。戦前、日本の軍国主義・植民地主義政策が台湾原住民に残したこれらの「負の遺産」について、台湾国内でさえ、ほとんど紹介されてこなかった。

戦後生まれの原住民は、日本植民地下にあった台湾戦時中の圧制の実体験もなく、かつ日清戦争後の台湾総督府による原住民に対する武力討伐の惨状についても、具体的な事実を知らされる機会がなかったのである。

### 3. 台湾原住民の軍人・軍属遺族

台湾原住民戦争被害者遺族の代表者の一人「チワス」の出身と訴訟にいたる経緯について、

以下『出草之歌』の内容を紹介する。映画はチワス以下「反靖国4地域共同行動」のメンバーが戦争被害者遺族としての歴史的アイデンティティを確立していく姿を描いている。

チワスは台湾原住民タイヤル族の人である。中国名は高金素梅という。1965年生まれ、父は蒋介石政権と一緒に中国から台湾へ渡ってきた軍人であり、母は台湾原住民タイヤル族の人である。現在、台湾原住民を代表している二期目の国会議員である。

2002年に当時まだ一期目の国会議員のとき、ある日、友人の家で日清戦争直後の1895年に、日本の台湾領有開始に伴い、日本軍が「理藩」と呼んでいた原住民討伐の写真集を見た。それは抵抗する原住民戦士の首を日本軍が日本刀で切り落とす瞬間の写真であった。チワスはその写真を見た瞬間の気持ちを次のように述べている。

私は日本軍が討伐の記録として誇らしげに抵抗した原住民の首を切り落とした瞬間の写真をみて、全身鳥肌が立ち、熱い涙がこぼれるのを抑えることができなかった。ついに自分が誰であるかを分かった<sup>2)</sup>。

その写真を見て以来、チワスは原住民戦争犠牲者のために何か役に立ちたいと決心した。辿り着いた具体的な目標は靖国神社に合祀されている同胞の名前を取り下げる運動である。

その後チワスは2002年から2005年まで9回来日し、靖国神社に合祀の取り下げを求め続けた。その間、チワスの行動や訴えに共鳴した人々の輪が次第に大きくなり、更に国境を越えて、韓国・沖縄・日本の戦争犠牲者遺族も連動し始めた。

2005年3月に「反靖国4地域共同行動」のメンバーが靖国に訪れたが、神社側は会見を拒否した。チワスが神社に向かって「私たちは祖先の霊を取り戻すまで、何回でもやって来る。次はこの10倍の原住民がやってくるだろう！」と宣言して、神社を後にした。

それから僅か3ヶ月後、チワスはその宣言通り、前回の10倍を越える原住民を組織して再びやってきた。2回目来日した原住民はタイヤル、ブヌン、パイワン、タロコなど8族に及び、それぞれがその部族を代表する有力者たちであった。

なお映画の中には描かれていないが、説明を補足すればこの2回目の日本行きに際して、台湾の空港では大きな記者会見が開かれている。台湾の多くのメディアが集まり、そのうち3社がチワスらの日本行きに同行取材している。1千万円を超える来日費用のすべてが“カンパ”でまかなわれている。この事実から、今回の行動が台湾世論の強い支持の下で実行されたことがわかる。

#### 4. 「還我祖霊」の闘い

再び映画の内容に戻ろう。映画はチワスらの2回目の来日における闘いぶりを次のように記録している。

2005年6月13日午後、成田空港の到着ロビー出口に民族衣装をまとった台湾原住民族の姿があった。その中にタイヤル族の衣装を着たチワスの姿もあった。原住民たちは14日に靖国神社において「還我祖霊」の儀式を行う予定であった。

当日、出発直前になって、警察から靖国神社の手前(300メートル)でバスを待機させ、そこ

からは警察が誘導する、という知らせが入った。一行は言われたままその地点に到着したが、そこでは大勢の警官がバスを完全包囲し、バスのドアを封鎖し、代表3名のみがバスから降ろされた。そこには支援者もマスコミもいなかった。(予定の第一鳥居付近で待機中)。「第一鳥居はすでに右翼が占拠している。入れない。皆さんの身の安全を確保するために、これ以上は進ませない…」という警官の放送が流された。チワスを始め、遺族たちが嚴重に抗議している内に、神社側の担当者も現場に現れ「第一鳥居付近での儀式を許可したことはない。話し合う余地はなく、一切許可しない。阻止する」と言い放ってそそくさとその場を離れていた。

バスの中に閉じ込められた同行取材陣がバスから強引に出ようとして警官と揉み合うが、外部との連絡も出来ない状態で、全員が再びバスの中に押し戻された。この明らかな取材妨害に対し、バスに閉じ込められた取材陣は激しく抗議し、ようやくバスから降ろされたのは事態がすでに終結する直前であった。

支援者、マスコミが徐々に現場に到着。チワスはその場で簡単な記者会見を開く。そのころ「第一鳥居」から移動してきた、歩道に溢れるばかりのマスコミと日本側支援者に向かって、チワスら一行が持参していたプラカードや写真を広げ、神社側と警察の対応に激しく抗議した。チワスは、仲間がまるで家畜のようにバスの中に閉じ込められている状況を目の当りにして、「原住民は過去も現在も、こうして人間として扱われてこなかったのだ！」と涙ながらに抗議した。

チワスは一時間近く包囲していた警察に対し抗議を続けた。その間、子供や老人を含め原住



民たちは飲み物もなく、トイレにも行けないままずっと閉じ込められたままであった。仲間の身を案じたチワスがようやく再びバスに乗り込み、その場を離れた。警察は“保護”を名目に、結局は原住民の靖国神社への立ち入りを阻止した。「靖国」が右翼団体と国家（警察）によって守られた存在であることを原住民たちは身をもって体験した。

一行は記者会見が予定されていた「弁護士会館」に移動し、玄関正面で各民族の民族衣装を纏った一行の全員が並び、靖国神社で出来なかった「還我祖霊」の儀式を行った。右翼と警察が一体となった妨害によって、靖国神社に近寄ることさえできなかったチワスは、日本の支援者に対して「私たちは帰台後、すぐに更なる闘争を行うであろう！」と宣言した。

##### 5. ニューヨーク国連本部前での闘い

それから僅か3ヶ月後、05年9月15日に台湾原住民の各部族代表者約60人がニューヨークの国連本部で、日本政府の戦争犯罪と歴史改ざん、靖国への原住民の合祀などに対して抗議行動を行っている。映画はプラカードを掲げ、横断幕を持って行進しているチワスらの姿を映している。横断幕には「Give Back Our People's Souls! Koizimi Go To Hell!」と書かれていた<sup>3)</sup>。

この大規模抗議行動に先立って、チワスを始め、原住民代表先発隊8人はサンフランシスコで日本総領事館に抗議を申し入れている。ところが、サンフランシスコ日本領事館での抗議行動は、事前に領事館との予約なしに行われたということで、日本領事館側は「事前に来訪の連絡も無く、無礼である」と言い放ったとされる。それに対して原住民代表は、「日本は台湾

を侵略するのに“事前連絡”をしたのですか？原住民の土地を奪うのに“事前連絡”をしたのですか？」と反論した。これに対して、日本領事館員は何も答えることができなかつたとされる<sup>4)</sup>。

ニューヨーク国連本部前での抗議行動は、現地の在米中国人・台湾人を中心とする支援団体が参加した。この一回の支援集会だけで、6万5千ドル（約700万円）のカンパが集まった。今回の60人にも及ぶ渡米は、前回6月の訪日抗議行動と同様、その千万円単位に及ぶ経費のすべてがカンパによって賄われていた。以上の事実は、台湾原住民の日本政府に対する抗議行動が台湾国内はもとより国際的にも大きな支持を得ていることを物語っていると言える。

映画は、2005年11月ブサンで開かれた抗議集会の様子を映している。当時ブサンではAPEC会議出席のため小泉前首相が滞在していた。アメリカ国旗と日章旗を描いた横断幕をもつ人々が大勢集まっている。抗議集会のステージで、チワスは韓国・琉球・日本の原告団と共に日本政府に対する抗議として「生命の歌」を歌っている。映画の最終シーンでは、次のような映像を映している。タイヤル族の男性が伝統的衣装を見にまとい、写真を手に持つ様子、チワスの顔が映される。最後に画面は日本兵に首を切り落とされる写真を大写しして、終幕となる。

##### おわりに：『出草之歌』が描いたもの

記録映画『出草之歌』が描いていたのは、台湾原住民の歴史的アイデンティティ確立の過程であり、慰霊をめぐる民族自決の闘いであった。

戦後生まれの原住民は、次の三つの歴史アイ

デンティティをめぐる「歴史の断層」に直面している。第一の次元は、日清戦争直後の一代目に対する撲滅行為についての歴史認識である。第二の次元は、被支配者の地位にあった台湾原住民が高砂義勇隊として、日本軍によるアジア支配に利用されていったという歴史の皮肉についての認識である。第三の次元は、漢民族中心に編成された台湾史の情報の中で、マイノリティとしての原住民の劣勢な状態についての理解である。台湾内部のマイノリティとしての原住民の劣位こそが、日本軍が高砂義勇隊をアジア支配に利用できた素地だからである。

「返我祖霊」の闘いは、チワスら戦後世代の原住民がこの三つの次元の歴史的身份を確立していく闘いであった。そして、第二と第三の歴史的身份は、同時に、台湾マイノリティとしての原住民族アイデンティティの問題でもあった。

靖国合祀取り下げ要求、及び「返我祖霊」運動の核をなしているのは、これらの歴史的・民族的アイデンティティである。すなわち「返我祖霊」運動は、軍人軍属遺族の霊を原住民自らのやり方で祀りたいという慰霊をめぐる民族自決の運動であると言える。同時に、台湾原住民は、被支配者でありながら、日本軍国主義のアジア支配に加担させられた戦争被害者であったという点で、合祀取り下げ訴訟は、台湾原住民

の民族的尊厳を取り戻す闘いでもあると言える。出草之歌の終幕に登場したタイヤル族男性の姿——伝統的衣装に身にまとい、日本兵に首を切り落とされる原住民の写真を手に持つ男——は、こうした民族の歴史的身份を象徴するものとして描かれていたのである。

#### 注

- 1) 記録映画『出草之歌』の解説パンフレットによる。この記録映画の監督者、井上修は書いた「音楽ドキュメンタリー『出草之歌 台湾原住民の呐喊—背山一戦』によせて」一文で、映画の撮影経緯を紹介した。
- 2) 記録映画『出草之歌』による。映画の最初にチワスはインタビューを受けたシーンに、日本軍が抵抗した台湾原住民の首を日本刀で切り落とす瞬間の写真を紹介した。
- 3) 台湾原住民と共に闘う会の会長、墨面の「台湾原住民族 最後の闘い〈背山一戦〉」の文章による。『首を狩る部族は歌がうまい』に収録されている。出版は、NDU（日本ドキュメンタリスト・ユニオン）2006年。
- 4) 同上。

#### 参考文献

- 台湾原住民研究概覧（風響社、2001年）  
朝日新聞2005年10月18日、朝刊  
朝日新聞2006年8月15日、朝刊

## 資料2 台湾原住民関係略年表

西暦	事 項
1544	ポルトガル船員、洋上から台湾本島を眺めて「Ilha Formosa」(麗しき島)と賞賛。16世紀には漢人や日本人や商人・漁民などが台湾本島で活動していた。
1624	オランダが、台湾南西部(今の台南)を占領。オランダは、原住民を武力で服従させた後、各集落の首長を年に一回集めて、命令を伝え各地域の様子を報告させた。原住民から集められた鹿皮は日本への重要な輸出品となった。
1626	スペインが鶏籠(今の基隆)を占領し、2年後「淡水一帯」を占領、原住民へキリスト教布教を企てる。
1642	オランダがスペインの勢力を台湾から駆逐。
1662	鄭成功がオランダの勢力を台湾から駆逐。鄭氏政権樹立。
1683	鄭氏政権崩壊。
1684	清朝の台湾支配が始まる。台湾は福建省の台湾府となる。17世紀以降、中国大陸の福建省・広東省から漢族の移民が本格化する。清朝は、原住民に漢族式の姓を与え、租税徴収・服役などで行政組織に組み込んでいき、学校を各地に設け、漢語を媒介に儒教的教育を施した。漢化した原住民は「 <u>熟蕃</u> 」と呼び、それに対して、清朝の支配下に入らず漢化していない原住民は「 <u>生蕃</u> 」と呼ばれた。
1874	1871年の琉球民の遭害事件に対して、日本軍が台湾南端へ出兵してパイワン民族の高士仏社・牡丹社などを武力攻撃する(台湾出兵〔牡丹事件〕)。
1895	下関条約で日清戦争に勝利した日本が清朝に台湾を割譲させる。台湾総督府が設置され、総督府の官吏が各地で原住民との接触を図る。台湾南端の恒春上十八社・下十八社のパイワン民族のように、自ら日本に帰順を申し出た原住民首長もいた。日本統治初期、原住民族による漢人や日本人への襲撃も頻繁に起こった。それに対して総督府は、警察や軍隊を投じて抵抗する原住民を「討伐」の名目で攻撃した。
1896	原住民を管轄する機関として撫墾署が11カ所に設置される。総督府は山岳部の原住民居住域と山麓との境界に見張り所を置いて、原住民の出入りを取り締まり、日本人警察官や漢人・「 <u>熟蕃</u> 」が守備をした。原住民を囲い込んで服従させ、「 <u>帰順式</u> 」を行い、駐在所を設置して実効支配を確立していった。
1897	第一回の「内地観光」が行われ、タイヤル・ブヌン・ツオウ・ルカイの原住民8人が長崎や大阪・京都・東京などを旅行する。
1905	藩人公学校が設置される。
1910	山岳部の原住民に対する日本の軍隊・警察の武力攻撃が本格化する。
1931	同化政策が本格化する。1936以降、台湾全体で「皇民化運動」がはじまる。
1935	「 <u>生蕃</u> 」を「 <u>高砂族</u> 」に改名。
1941	高砂挺身報国隊(第一回高砂義勇隊)がフィリピンへ出征する。以後、高砂義勇隊としてニューギニアなどに出征する。
1944	台湾に徴兵制が実施される。原住民の薫空挺隊がフィリピンのレイテ島で戦う。
1945	日本敗戦、台湾は中華民国政府に接収される。
1947	原住民の名称「 <u>高山族</u> 」が「 <u>山胞</u> 」(山地同胞)に改称される。
1948	「 <u>山地保留地管理法</u> 」が実施され、土地の所有権は政府に帰し、原住民個人には使用权が認められることになる。(以後、この法令は度々修正されて現在に至る)。
1951	台湾政府により、「 <u>国語運動</u> 」が推進され、原住民に対して国語(中国語の北方方言を基礎とする標準語)習得の徹底が求められる。
1974	インドネシアのモロタイ島で元日本兵スニヨシ(日本名:中村輝夫、アミ族)が発見される。
1975	日本で「台湾人元日本兵の補償問題を考える会」が発足する。
1984	「台湾原住民権利促進会」が設立される。この時初めて先住諸民族の総称として「台湾原住民」という名称が創られる。
1988	日本の国会で「特定弔慰金等の支給の実施に関する法律」が成立し、日本政府は、台湾人元日本兵の戦士遺族・重傷者に対し一人につき200万円払うことになる。
1992	日本の最高裁判所で台湾人元日本兵の補償を求める訴えが棄却される。



1994	<p>中華民国憲法増修条文（追加・修正条文）で、「山胞」（山地同胞）という名称が「原住民」に改められる。</p>
1995	<p>漢族式を強制されていた個人の姓名が、自己申告で民族伝統の命名法で戸籍に登録することが可能になる。日本の交流協会から、台湾人元日本兵の軍事郵便貯金に対して確定債務として元金120倍での返還がはじまる。</p>
1996	<p>行政院の中に「原住民委員会」が設けられる。小学校で「郷土教育」課程が始まり、原住民の言語・伝統工芸・舞踊などを教えられるようになる。</p>
1997	<p>中華民国憲法増修条文に「原住民族」という言葉が明記され、多元的文化を承認して原住民族の言語と文化の発展を擁護することとされる。この条文で原住民に関する国家立法の制定も約束される。中学校で「認識台湾」課程がはじまる。婦女救援基金会の調査により、新たに12人の原住民の従軍慰安婦の存在が確認される。</p>

出所：日本順益台湾原住民研究会『台湾原住民研究概覧』（風響社，2001年）p394-396抜粋